

## 廓文章

吉田屋の段

年の内に春は来にけり一白に、餅花開く餅搗きの

「サツサ、搗けく、エイサツサ」

嘉例の日取り吉田屋の、仲居のお松が白取りの、大汗たらく賑しき。

門に売り声、

「山草や、ちよつと祝ひましょ。裏白、櫛、田作でござんせの。お家は金持ち、代々福々松吹く風や松」

売りの、声勇ましく聞こえる。店先に、寄り集りし仲居衆が、客の噂を取り取りに、中にも目尻の下つたる、お鶴が低い鼻びこつかせ、

お鶴「なんとお亀さん、いくつになつても正月は嬉しなもの、取り分けこの餅搗きは廓中の名物。お出入りの長兵衛殿が木遣りで搗くや搗く餅は、まづ恵方棚、

聞いてお鶴が笑顔、

お鶴「オ、定めてそれは面白かつたであらう。それはそうとあの夕霧様のご病気は、なんとした事ぢやぞえ」

お亀「サイノウ、あれもやつぱり恋ぢやはいな。わしらもたんと覚えのある事、余所様には思はぬ」

と、人の心を推し量り、思ひ遣るこそ苦界なり。

喜左衛門、表に出で、

喜左「また例の高話しか。皆々早う部屋へ往て、晩のお客に粗相のない様、心を付けるが第一ぢや。日暮れまでとろりとしや。また転た寝して風邪ひきやんな」

と、気を付けるのも商売上手、仲居にまで花を持たせる如才なき、

皆「アイくくく」

と口軽の、割りには重き石臼を、振り立て皆々立つて行く。

喜左衛門後見送り、

喜左「ア、仲居の癖として、寄り集ると客の噂ばかり。それも一時の憂さ晴らしか、ハハハハ。この間

神の棚、鏡餅取る遣手衆の、顔に取り粉の面白さ、妓衆の笑ひ、禿が手折る柳の枝、春に近付き年も近付く、やがて廓も谷の戸開けて、初鶯の羽根繕ひの君もあり、正月買ひの橙、大尽、太夫様、廓の繁昌来る客も、来る人もしやつきりとして堅いぞえ」

と、言ふ

尾に付いてお亀が壺口、

お亀「オ、お鶴さんの言はんす通り、堅いも堅い。石より堅い昨夜のお客の所を問へば、京の六条数珠屋町」

お鶴「ホ、お亀さんとしたことが、そりやマア義太夫節で『かゝさんは眩暈持ち』とは言はなんだかえ」

お亀「イ、エイナ、目の大きい髭むちや、商売を尋ねたら『講釈師ぢや』と言ふたぞえ。わしが膝を台にしてな、扇でパチく拍子を取り真面目になつて喋る故、余り可笑しさ聞く辛さについ居眠るとの、ソレまたかうと膝を扇でびつしやりと、もう講釈師には懲り懲りした」

と、話を

に何かの拵え、そうぢやくく」

と喜左衛門、独り言して入りにける。

吹き送る。吹雪と共に神風の竈賑ふ大神楽、屋台、長

持、獅子頭、真面目顔なる横笛に、太鼓の役は権太夫、

剽軽親仁が腰板を、捻ぢれくねらし頬冠り、手毬を一

つ頭の瘡

権太「なんと獅子太夫、もう正月が近づくに、おれが頭のこの瘡、どうしても取れぬが、どうか工夫はあるまいか」

獅子「オ、その瘡はおれが手の平でそなたの頭を、思ひの儘張り倒したら」

権太「ブルくくく、滅相な事言ふ人だな。そんな事言はずと取つてくれ、取つてくれ」

獅子「そんならかうせう。この手毬の曲取りを、そなたが首尾よう出来るなら、今すぐにも取つて遣らう」

権太「ヤ、それは有難いな」

獅子「ヤコレ、もし仕損じたら、この手がすぐにそなたの頭へお見舞ひ申すが、それ合点か」



男共口々に、

男<sup>1</sup>「ヤ、なんぢや。風の神か鳥威しを見る様な態度で喜左衛門に逢ひたい。ハ、ハ、ハ、テモ横柄な」

男<sup>2</sup>「オ、そうぢやく。百貫目も遣ふ大尺の言ふ様な、フン阿呆らしい、頬まかされな」

と言ひければ、

伊左「ホ、百貫目がそれ程に尊いものでもない。喜左衛門といふべき者でいふ程に、さりとは逢はしてくれい」

男<sup>1</sup>「ヤ、こいつがく。様々の事を抜かしをる。それ程逢ひたくば逢はしてやらう。こりやこんな目に逢はしてやらう」

と竹箒振り上げる、

喜左衛門飛んで出で、

喜左「こりや待て、待て。今日は大事の餅搗き、ひよつと怪我でもあつては悪い。また強請り者かも知れぬ。

粗相をすな、粗相をすな」

と押し留め、

喜左「喜左衛門に逢ひたいと仰せあるは、どなたでござります。どなたでござる」

と笠を覗いて、

喜左「ヤア、お前は伊左衛門様」

伊左「なんと喜左、懐かしさに逢ひに来ました」

喜左「ア、お懐しやく。京大仏馬町に御逼塞と承はり、夕霧様より数通の御状飛脚も二三度。奈良大津まで尋ねさせ、たつた今もお噂。まづ、お馴染みの小座敷で、二年積もるお物語。サ、奥へ、奥へ」

と、袖引けば、

伊左「ア、これ喜左、さりとは紙子触りが荒い、荒い」

引けば破れる掴めば後に師走浪人、昔は鍮が迎ひに出る、今は漸う長刀の、草履を脱いで編笠の中の、

〔林傳クシ〕座敷に通りける。

喜左「お寒からう」

と喜左衛門、縮緬に紅絹裏の、羽織をふはと打ち掛くれば、

伊左「ア、これは言はれぬ。寒晒しの伊左衛門、少しも苦しからねども、志を着致す」

と、戴いて着る有様、

喜左衛門つくく見て、

喜左「ア、浮世ぢやな。誰あらう藤屋伊左衛門様に、こ

の吉田屋喜左衛門が着せませす羽織。たとえ蜀江の

錦、二重鶴の古金欄でも、戴いて召しませうか。本に

涙が零れます」

と目を摺るを

見て、

伊左「ア、これ喜左、愚痴なぞや、愚痴なぞや。この紙子の仕合せ、さらく無念に存せぬ。総じて重たい

俵物材木でも、牛馬が負ふは珍らしからず。犬か猫

かが負ふたらば、ヤこれはと人が手を打とう。おれも

丁度その通り、七百貫目の借金負ふて、びくともせ

ぬはおそらく藤屋伊左衛門、日本に一人の男。この身

が金ぢや。総身が冷えて堪らぬく。ア、いかう冷え

るはいの」

喜左「ヤ、総身が金とは忝い。喜左衛門が餅搗きに大きな金がお入りなされた。ア、めでたいく。これから、まだ蓬菜は飾らねどまづ正月の心、ソレ三方飾つて持つておぢや」

女房「アイ」

と女房が櫛に、穂長、折敷、橙、柑子、蜜柑やなにや、櫛、搗栗。

女房「これはくお珍らしや旦那様、ようお出でなされました。まづ御祝儀のお盃を致しませう」

伊左「いやこれ内儀、喜左衛門といひこなたといひ、懇ろに蓬菜とまでは気が付けども、タとも霧とも得言ひ出さぬ。仄かに聞けば夕霧は事が氣病みにして、

命危うしと聞いたが、きつう重いか、たゞしまた無常の夕霧と消え失せて仕舞ふたか。嘆きを掛けまいとて

言ひ出さぬか。コレ、誓文で泣くまい。語つて聞かし

や。泣かぬ、泣かぬ」

と言ふ声も、氣遣ひ涙濁りける。

女房「イヤこれはお道理。夕霧様の御気色も秋の頃は



師走にこなたの様に隙ではござらぬ。七百貫目の借錢負ふて夜昼稼ぐ伊左衛門、こんな時寝ねば寝られぬ。エ、邪魔なされな惣嫁殿」

と、ころりと転けて空躰。

夕霧「身に覚えはなけれども、恨みがあらば聞きませう。イヤくくく寝さしはせぬ、寝さしはせぬ」

伊左「こりやなんとする。この体になつても藤屋伊左衛門、今の様に奥座敷の客に踏まれたり蹴られたりする傾城に近付きは持たぬ。アノこゝな萬歳傾城」

夕霧「ムウ、この夕霧を萬歳とはえ」

伊左「オ、萬歳傾城の因縁知らずか。知らずば言ふて聞かそう。コレ、待の足に掛けて蹴られるを、萬歳傾城といふぞや」

へ誠にめでたう候ひける

伊左「しかも足駄履いて蹴るやら」

へ年立ち返る足駄にて、誠にめでたう候ひける

伊左「しかし、何も身過ぎぢや。あんなよい衆には蹴られても損はいかぬ。欲も知らねば身が立たぬ」

へ欲若に御萬歳、年立ち返る足駄にて、誠にめでたう候ひける

伊左「町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、蹴るくくく。コレ喜左、餅でも米でも早う遣つて去なしやいの」

と、訳も涙の捨て詞、煙草引き寄せ吹く煙管、そらさぬ体にてゐたりける。

夕霧涙諸共に、

夕霧「恨みられたり託つのは、色の習ひといひながら、それは浮気な水浅葱、派手な浮き名が嬉しうて、人の誇りも世の義理も、白紙に書く文の伝手、返事取る手も心急ぎ、口舌の床の善し悪しも、嬉しいにつけ悲しいにつれて忘れたことはない。それにお前の悪性を、わしが案じは移り気な。外にもしやと言ひ掛か

り、背中合はせて寝てみても、つひそれなりに張り弱く、仲直りすりや明けの鐘、憎うてならぬ鳥の声。なんの鳥が意地悪で、鳴くぢやなければと後朝に、去なせとむない心から、儘にならぬは色の意地、広い世界に住みながら、狭う楽しむ誠と誠。それが高じて内方

り。

かゝるところへ下女、端、遺手、禿に、女房も、

競ひ掛かつて喜左衛門、

喜左「申し、伊左衛門さん、申し、伊左衛門さん、

お前の親御妙順様よりお人が参り、御息様も母屋へ引き取りあなたも御勘気赦りました」

女房「本にそれいな太夫さん、お前も身請けの埒が明き、大抵嬉しいことぢやない」

喜左「オ、オ、オ、この喜左衛門が精力で本復さしてみませう」

と、家内が勇む勢ひに、連れて本復伊左衛門、悦びの眉を開くや扇屋夕霧、名を万代の春の花、見る人、袖をぞ連ねける

(2026. 4. 25)

心強や胴慾な。憎や」

と膝に引き寄せて、恨みつ泣いつ声を上げ、空に知られぬ袖の雨、隈なき夜半の月影も、曇るばかりに見えにけ